

政府による農業振興策 ～グサル県の事例～

1. アゼルバイジャンの農家はソ連崩壊後に自立を余儀なくされ、知識や経験の不足のため様々な問題を抱えることになりました。この状況を打開するため、政府は各県に「国家農業開発センター」(農業省傘下、全 60 か所)を設け、農家や経営者を対象に、農業生産の効率化、技術指導、経営支援、情報提供等の取組を行っています。

[各県における農業開発センターの連絡先情報 \(axa.gov.az \)](http://axa.gov.az)

2. 農業生産と政府支援の実例として、グサル県の農業開発センター長から話を伺いました。

(1)グサル県はバクーの北方約200キロ、ロシアと国境を接しており、旧ソ連時代から農業(キャベツ、ジャガイモ等の野菜、リンゴ、洋ナシ等の果物など)、畜産が盛んです。

(2)同県では土壌の質や気候の適性から、インテンシブ農園(集約栽培)の普及が進んでいます(県内農園面積 1 万2600ヘクタールのうち同農園7000ヘクタール)。インテンシブ農園とは面積当たり生産性が高い農園で、樹木を1メートル間隔で植えてワイヤで繋ぎ(倒れ防止)、点滴チューブで水、液体肥料、農薬を施します。

(3)政府はインテンシブ農園の導入促進のため補助金による支援を行っています。例えば、点滴灌漑システムを利用する農園に対して、初年度に4000マナト(約24万円)、その後4年間に毎年1ヘクタール当たり730マナト(約4万5千円)、以降毎年1ヘクタール当たり250マナト(約1万5千円)の補助金が支給されます。

(4)政府が支援するグサル県の農業企業の一つとして「メタク社」があります。同社は200ヘクタールのインテンシブ農園でリンゴ(日本の「ふじ」も栽培)、洋ナシ、ネクタリン、桃、さくらんぼ等を栽培し、自社の冷蔵倉庫(容積5千トン)で保管後、主にモスクワとロシア各都市にトラック輸送しています(ロシア市場は大きく高収益、品種選定もロシア市場のニーズに合わせる由)。同社は各種農業資材(梱包・輸送容器、コンテナ、インテンシブ農園用コンクリート柱、ワイヤ等)も生産しています。

3. 日本との関係について、同センター長から、「グサル県の農業振興のため、日本から様々な協力を得たい。例えば、生産技術や経営ノウハウに関する知見の共有、日本品種の果樹栽培(モスクワ等から種子、苗木を購入)などが考えられないか」との話がありました。

(以上)